カルチュラル・スタディーズとアート研究

序にかえて

仲　間　裕　子

立命館大学国際言語文化研究所の「カルチュラル・スタディーズとアート」のプロジェクトの考案は，所属する社会学系の学部の研究環境を活かしてCSの研究者と共同研究をという提案から始まった。1998年度から2000年度の3年間のプロジェクトを振り返ってみて，CS研究の政治学的領域のなかで美学的思考を構築していくことがいかに困難であるかということ，しかし一方で美学の領域のなかに政治学的問いが不可欠な時代であることを改めて確認せざるを得なかった。西洋中心史観からの転回，さまざまな支配構造に支えられたヒエラルキーへの反省など，われわれを取り巻く環境への態度の変化は，なによりも批判的スタンスを芸術作品および芸術研究に求めていることが無視できない事実であるからだ。

このような論点からの試行錯誤のなかで，さまざまな刺激的な研究発表をいただいた。CS理論とエスニシティーの問題からは「ニューアート・ヒストリーとカルチュラル・スタディーズ」(加藤哲弘氏，関西学院大学)，「'カルチュラル・スタディーズとアート' のためのノート」(水嶋一憲氏，大阪産業大学)，「サバルタン・スタディーズ」(三宅俊夫氏，佐々木哲氏，立命館大学大学院)，「近代美術史とユダヤ」(國府寺司氏，大阪大学)，「エチオピア舞踊とエスニシティ」(遠藤保子氏，立命館大学)，「プリミティヴィズムの成立」(大久保恭子氏，立命館大学)，また美術を社会学を含めた観点からは「美術の見立て—大学の地平から，美術館の地平から」(荻原佐和子氏，セゾン美術館)，「印象主義の動向」(六人部昭典氏，大手前大学)，「エル・リシツキーの作品と空間表現の展開について—表現の融合と実験を中心に」(木村早苗氏，立命館大学大学院)，「1920年代におけるエル・リシツキーの空間概念とその活動」(田坂博子，大阪大学大学院)，「Impression on Impressionism」(上田高広氏，立命館大学)，「演出家としての草間弥生：『病』をめぐる言説と記録写真を中心に」(三上真理子氏，京都大学大学院)，「展覧会の企画と開催まで：ピュリッツァー賞展を中心に」(早川与志子氏，日本テレビ)などである。

今回の特集号への寄稿は最終年度の研究会のなかから「感覚のテクノロジーという美学／政治学」(毛利嘉孝氏，九州大学)，「身振りとしてのカルチュラル・スタディーズ—節合(アーティキュレーション)を拒否するシャロン・キンセッラのマンガ論」(ジャクリーヌ・ベルント氏，横浜国立大学)，「『アジア美術館』というあり方—その意味・方法・システム」(後小路雅弘氏，福岡アジア美術館)，「ドクメンタ documenta の美学と政治学」(仲間裕子，立命館大学)である。毛利，ベルント，後小路各氏の示唆に富んだご論考においては，CS理論という西洋の知を日本やアジアというわれわれ自身の立場を切り開くひとつ手段として考察され，CS研究の新たな方向性を示されている。

本プロジェクトの総括として2001年3月9日と10日，立命館大学においてハンス・ベルティング氏（ドイツ，カールスルーエ造形大学教授）を囲むワークショップとシンポジウムを開催した。2日間のワークショップとシンポジウムには関西近辺だけでなく，東京や福岡などからも延べ130人ほどの出席者があった。このシンポジウムは立命館大学国際言語文化研究所，鹿島美術財団，美術史学会，産業社会学会の共催で行われた。

(1)　ワークショップ

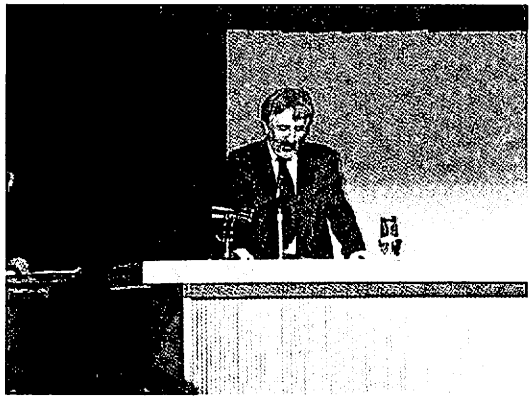
「『美術史の終焉？』以後四半世紀」をテーマに，ハンス・ベルティング氏，岡田温司氏（京都大学助教授)，林道郎氏（武蔵大学助教授)，仲間裕子（立

命館大学)が報告者及びパネリストとして参加した。ベルティング氏は著書の『美術史の終焉？』において社会における美術作品の機能と受容の分析に重点を置いた美術の歴史の新しい方法論を提唱されているが，今回のワークショップでは，その後20年を経た現在において美術史の役割や可能性は何かなどについて討論の場を設けることを主目的とした。ベルティング氏の報告「TVスクリーン上のアート—グローバルな美術とローカルな美術の歴史についての考察」は，コンピュータ化が急速に進展し，テクノロジーが「グローバル・アイデンティティのイコン」とされる時代において，美術史研究そのものの変化が再び求められていることを，美術とテクノロジーの今日的状況・受容の比較，マクルーハンを引用した「反環境」としての美術，美術のトランスカルチュラルな視点，そしてコスースとダントの「美術と哲学」の考察から論じられた。ベルティング氏の報告はテクノロジーの時代においては，美術はあくまで社会の現況に対するクリティカルな反射鏡であることが求められているということに重点を置いた内容であった。したがって美術館も美術作品の宝庫としての存在から，作品を巡って社会についての討論を引き起こす場に変容しているという。そこで美術史研究はもはやヘーゲルの歴史観から解放され，西洋中心主義からローカルなものに視点をおいた方向性が必要であることを認識すべきであろうと教示された。以上のような指摘はナム＝ジュン・パイクのメディア・アート作品《TV仏陀》において実証的に体験されうるとして，作品の紹介と分析が行われた。岡田氏は『美術史の終焉？』においてベルティング氏が求めた美術史研究における社会学的・人類学的視点が80・90年代の美術史・美学研究の展開と動向の中心であったことを考察し，林氏は日本の美術史研究の西洋からもたらされる研究モデルの偏重から「脱構築」への試みを報告された。また仲間は美術史のローカルな視点のひとつとしてとくに近年ドイツで注目される，アイデンティティ追求としての受容史研究の是非について問題を提起した。

(2) シンポジウム

「身体，メディアそしてイメージ」をテーマに，ベルティング氏，高階秀爾氏（東京大学名誉教授），大橋良介氏（京都工芸繊維大学教授），辻成史氏（大手前大学教授）にそれぞれ報告をしていただいた。ベルティング氏は「影の画家ダンテ」において，1465年に描かれたドメニコ・ディ・ミケリーノのダンテの肖像画が影を投げかけていないことに着目し，ダンテ自身が煉獄で彼の生きた姿を描写したこととは対照的に，絵画は死のダンテの再現であることを指摘された。身体を喪失した場合，イメージと影が不在の身体の記憶となることを詳細に論じられ，マザッチオの《病者を癒す聖ペテロ》とミケランジェロの《最後の審判》をこの論点の展開のなかで考察し，報告された。高階氏は「近代ピグマリオンの運命」において，近代の身体性の問題を論じられた。18世紀の合理主義のもとに生まれた機械論的人間観と自動人形，その凋落の結末としてのフランケンシュタインに至る過程，そして19世紀以降もはや超越的，神的なものへの信頼が失われた時代にガラテアはファム・ファタールに変貌し，世紀の女性の「タイプ」になることをビアズリーのサロメ像などを例に分析し，考察された。大橋氏は「‘メディア身体’としての世界」において，人間の身体そのものが全体として視覚性をもつ「全身視覚」であり，現代メディアの世界そのものも人間の身体性の展開として把握されうること，またハイデッガー他の論を引用し，「メディア身体としての世界」において，「自己」，「人格」，「自我」の概念が従来の理解を破って新たに解釈されることを指摘された。辻氏は「巡礼女エゲリアの闇—あるいはイメージの此方」において，初期ビザンティン時代と推定されるゲミレル島の会堂に描かれた船上に立つ人物のグラフィティを巡り，ベルティング氏のメディア・身体・イメージ論を引用し，暗闇のなかで当時の人々はこのグラフィティを身体を備えたイメージとして見たであろうことを，現実と表象＝イメージの互換として指摘された。

報告後のディスカッションにおいては，おもに身体にまつわる影とイメージについて意見の交換がなされた。



ベルティング氏によればイメージは媒体としてのメディアと表裏一体であるとともに，各メディア間を移動する「客人あるいは遊牧民」と考えられるが，イメージそのものの持つ意味から社会の鏡であり，イメージへの問いかけは社会分析に通じる。ベルティング氏はとくにイメージの媒体として身体を強調され，またイメージを芸術作品という狭い枠から開放して考察するイメージ人類学の試みを構想されている。CS理論と美学の接点のひとつは，このようなイメージの意味の捉え直しに求められると期待される。

現代の美術史研究において，受容史からイメージ人類学へと絶えず挑戦的な提案をされ，つねに国際的な注目を集めているベルティング氏をお招きし，このようなテーマについて討論する機会を設けることができたことは学術的に大きな刺激となった。事実シンポジウムに関して好意的なご意見や問い合わせを頂いた。

シンポジウムの発表に関連して「影の画家ダンテ」（ベルティング氏，田中不二夫氏訳），「‘メディア身体’としての世界」（大橋氏），「レムブラントの《三本の十字架》—方法論的プログラムに向けて—」（辻氏），またワークショップに関連しては「TVスクリーン上のアート—グローバルな美術とローカルな美術の歴史についての考察」（ベルティング氏，仲間訳），「『美術史の終焉？』とその前後—ワークショップ‘『美術史の終焉？』以後四半世紀’に寄せて—」（岡田氏），「出会いの難しさ：ベルティング先生を囲んで」（林氏）をこの特集に寄稿していただいた。

このプロジェクトを進めるにあたって，発表と寄稿を通してご協力を頂いた研究者の方々と国際言語文化研究所所長の西成彦氏にこの場をお借りして厚くお礼を申し上げたい。ベルント氏にはプロジェクトの企画から，シンポジウムの通訳に至るまでご協力をいただいた。また同研究所事務室の伊藤光春氏，中橋直子氏には運営の面で御苦労をおかけした。最後にシンポジウム開催を可能にした準備委員会代表の三木いずみ他，野崎るみ花，奥田素子，竹下暁子，内藤紫都の院生みなさんに感謝の意を表したい。